

治文学史の周辺

平岡敏夫著

有精堂

明治文学史の周辺

著者略歴

昭和五年香川県に生まれる。東京教育大学大学院博士課程修了。現在、筑波大学教授
〔著書〕『北村透谷研究』(昭42・有精堂)『日本近代文学史研究』(昭44・有精堂)『続北村透谷研究』(昭46・有精堂)『日本近代文学の出發』(昭48・紀伊国屋書店)『漱石序説』(昭51・塙書房)
〔現住所〕東京都中野区上鷺宮五丁目二〇番地一〇号(郵便番号一六五)

昭和五十一年十一月十日 初版発行

著者

平岡敏夫

発行者

東京都千代田区神田神保町一ノ三九
山崎誠

印刷所

東京都千代田区飯田橋二ノ二四ノ一
株式会社文弘社
整版・海外印刷(株)

発行所

東京都千代田区神田神保町一ノ三九
有精堂出版株式会社

電話東京(二九二)一五二一三
振替口座 東京九一四〇六八四番

郵便番号 一〇一

◇落丁乱丁はおとりかえいたします。

目次

第一章	明治という時代	一
-----	---------	---

1	明治という時代	二
---	---------	---

2	啓蒙思想の位相	二七
---	---------	----

3	政治小説の問題——『涙の谷』の周辺——	三七
---	---------------------	----

4	明治ナシヨナリズムと歴史思想——羯南・蘇峰・愛山・透谷——	五七
---	-------------------------------	----

5	「国歌」と国歌	七〇
---	---------	----

第二章	明治浪漫主義	八三
-----	--------	----

1	明治浪漫主義と女流文学	八四
---	-------------	----

2	日清戦後の浪漫主義	九一
---	-----------	----

3	明治浪漫主義と鏡花	六
4	一葉とその時代	一〇六
5	明治浪漫詩と恋愛——透谷・藤村・鉄幹——	一六六
第三章 露伴と紅葉		
1	「いさなとり」試論——殺戮する露伴——	二六
2	露伴の文体	一五〇
3	露伴と紅葉——巴波川のほとり——	一六一
4	紅葉における〈町人〉	一六六
5	「金色夜叉」の文体——スタイルとフォーム——	一六九
第四章 透谷と藤村		
1	透谷における思想と文学	一七〇
2	透谷における恋愛と文学——Jungfräulichkeit=Chastity——	二〇一

3	透谷と藤村	二二八
---	-------	-----

4	藤村と「人生四季」	二三六
---	-----------	-----

5	藤村における父親像	二三四
---	-----------	-----

第五章	独歩と啄木	二四九
-----	-------	-----

1	『愛弟通信』の独歩	二五〇
---	-----------	-----

2	「山林に自由存す」	二五六
---	-----------	-----

3	透谷から啄木へ——明治文学史の一系譜——	二六三
---	----------------------	-----

4	啄木と「平民新聞」	二七三
---	-----------	-----

5	独歩・啄木研究の一展望	二八四
---	-------------	-----

第六章	鷗外と漱石	二九三
-----	-------	-----

1	鷗外における官僚の問題	二九四
---	-------------	-----

2	鷗外と陸軍軍医総監その他	三〇四
---	--------------	-----

3	漱石と紅葉	三二
---	-------	----

4	漱石と日露戦争	三三
---	---------	----

5	漱石の文明批評	三〇
---	---------	----

第七章	光太郎と光晴	三四
-----	--------	----

1	光太郎の文学	三四
---	--------	----

2	『道程』再論	三五
---	--------	----

3	国家と天皇と父と	三六
---	----------	----

4	金子光晴——「金亀子」——	三七
---	---------------	----

5	『鮫』と『落下傘』	三六
---	-----------	----

第八章	戯曲のなかの〈明治〉	四一
-----	------------	----

1	「明治の枢」小論	四一
---	----------	----

2	「オッペケペ」	四一〇
---	---------	-----

第九章 文学史家論……………四二五

1 逍遙の位置……………四二六

2 柳田泉論……………四二三

3 平野謙と藤村……………四四三

第十章 研究展望……………四五二

1 「文学史」叙述の問題——三好行雄著『日本の近代文学』——……………四五二

2 文学研究と学統——松坂俊夫著『樋口一葉研究』——……………四五七

3 一九七〇年代での課題……………四六六

4 研究展望……………四八一

復刻・小宮山天香『涙の谷』初巻……………四九三

第一章

明治という時代

1 明治という時代

1

「夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新体ノ詩ノ作ル所以ナリ」とは『新体詩抄』（明15）における巽軒井上哲次郎の周知の一節であるが、何よりも「明治」ということがそれ以前に対して強調され、同時に「日本」ということが強調されている。明治という時代は、幕藩体制下における封建的身分制・地域性からの解放を目ざしたものであり、身分制から放たれた個人の自立と地域性を打破しての日本という民族の自立が志向されていた。こうした個人意識・民族意識は当然文学の上にあられざるを得ず、とくに詩歌の上に鋭敏に反映されるに至ったのである。

『新体詩抄』の編著者のひとり、ちやん山外山正一が勝海舟を訪れ、『新体詩抄』を贈呈したとき、海舟は新体詩に類する自作を示したというが、昔蘭詩を訳したものと語った「思ひやつれし君」という一詩は有名である。

なにすとして、やつれし君ぞ、

哀れその、思たわみて、

いたづらに、我が世を経めや、

といううたいくちを見ると、恋の思いにやつれた佳人のおもかげさえちらついてくる優雅なびきを感じるが、「いたづらに、我が世を経めや」とあるごとく、その人生は、

ますら雄の、心ふりおこし、

清き名を、天に響かし、

かくはしき、道のいさを、

天つちの、いや遠ながく、

宜く人の、鏡にせむと、

目ざしたものであり、幕末のいつごろの訳詩か明らかでないとしても、修身齊家治國平天下的な理想を、みずみずしい個人の感性でうたっていることが知れる。こういう訳詩の制作それ自体がすでに明治という時代の先取であったのである。

その意味で『新体詩抄』にさきだつ文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』（初編 明14、第二編 明16、第三編 明17）は何よりもまず明治という時代の出発を示していると言えるのであり、音曲のみではなく歌詞にもとくに注意がはらわれていた。

てふく／＼てふく。菜の葉にとまれ。

なのはにあいたら。桜にとまれ。

さくらの花の。さかゆる御代に。

とまれよあそべ。あそべよとまれ。

第十七「蝶々」の第一連をあげたが、音楽取調掛長伊沢修二がかつて校長であつた愛知県師範学校付属幼稚園その他でうたわれていたもので、この歌などは異論なく選定審議を通過したという（山住正己『小学唱歌集』初編の成立）昭和40・4「文学」）。この歌詞のはじめ二行は、葉の葉・桜という日本の自然・風物に根ざす蝶の舞う情景にことよせてやさしい心情がうたいこまれているが、桜をあげたとき作詞者はそれをたんに桜としてうたいとどめることができない。「さくらの花の。さかゆる御代に」として、桜に象徴される「日本」・天皇の治世をそこに重ねたのである。日本の自然・風物をうたうことと、日本・天皇をことほぐことは無縁ではなかった。『小学唱歌集』にはあらわな教訓調のものと、それと一応無縁に自然讚美調のものが編みこまれているのだが、この「蝶々」の場合はごく自然に両者がひとつのものとしてうたわれているのである。戦後、小学校一年の「音楽」において、「さくらの花の。さかゆる御代に」は「さくらはなのはなからはなへ」と改められた。こうした日本意識・天皇意識の払拭、桜がたんに一個の花の位置におきなおされている事実からしても、明治という時代が逆光のように浮かびあがってくるはずである。そして、詩として見たとき、「さかゆる御代に」よりも「はなからはなへ」の方が無条件にすぐれているとはけっして言えぬという点にもまた、明治という時代の複雑な意味があらわれている。

第二十「螢」についても見ておこう。これは今日の「螢の光」であり、一番二番はいまもなおうたわれているが、三番四番までうたう学校は現在はないのではないか。

三 つくしのきはみ。みちのおく。

うみやまとほく。へだつとも。

そのまごころは。へだてなく。

ひとつにつくせ。くにのため。

四 千島のおくも。おきなはも。

やしまのうちの。まもりなり。

いたらんくにに。いさをしく。

つとめよわがせ。つゝがなく。

前記山住正己氏の研究によれば、右の三番ははじめ「筑紫のきはみ。みちのおく。わかるゝみちに。かはるとも。かはらぬこゝろ。ゆきかよひ。ひとつにつくせ。くにのため。」であったのが、『かはらぬこゝろゆきかよひ』とは父子兄弟姉妹又は朋友の間には常に言はぬ事にて重に男女間に契る詞にて（中略）恋ひしたふ心の通ふをいふ事なるべし学校に於て児女の徳性を涵養する目的の唱歌には甚不当なり」といった文部省普通学務局の批判を受け、取調掛の方では右のようなかたちに改めたのだという。「とまるもゆくも、かぎりとして。／かたみにおもふちよろづの。／こゝろのはしを。ひとことに。／さきくとばかり。うたふなり。」という二番を受けたものであってみれば、「かはらぬこゝろ。ゆきかよひ。」が「男女間に契る詞」「恋ひしたふ心の通ふ」と受けとられるというのは考えすぎであり、文部省当局の「徳性ノ涵養」「人心ヲ正シ風化ヲ助クル」（『小学唱歌集』緒言）というのがどのあたりにあるかがわかる。「児女の諷詠すべき者にあらず」とするのは、結局唱歌もまた明治国家体制の一環であることを示すもので、これは、

やがては与謝野晶子が『みだれ髪』（明34）において敢然とうたわねばならなかった事情の胚胎にはかならない。

四番についても普通学務局から批判が出た。原案では「千島のおくも。おきなほも。／やしまのそと。まもりなり」とあったのが「千島も琉球も日本ノ外藩ナリといふ意ならん果して然らば事実上甚穩当ならず」ということで「やしまのそと」は「やしまのうち」に改められたという。当然と言えば当然かも知れぬが、当局の国家意識の方が鋭く鮮明であったことの証左である。

「いつしか年も。すぎのとを。／あけてぞけさは。わかれゆく。」などは小学生に理解されていたとは言えぬにしても、この歌をはじめ、多くの詩編がほかならぬ小学校で全国的に教えられたということは、国民的心情の形成にはかなり知れぬ影響を与えたことになり、明治以後に作られた詩と国民とがこれほど密接に関係を持つことはのちの軍歌以外にはなかったはずである。『小学唱歌集』は国家機関による作成であり、国民が自発的な心情にもとづいてみずから作り出したものではないが、国家権力による強制だけではひろく国民にうたいがれるはずはないので、上からの詩の近代化に呼応するものを国民もまた内部に醸成しはじめていたとも言えるのである。

民間から詩の作り手があらわれるとすれば、それはすでに漢詩に託して自己の心情を吐露することのできた武士階級であり、また、新たに「明治ノ歌」「日本ノ詩」の自覚に達し、みずからの手でそれを試みようとするのも武士階級から出た知識階級である。東京大学の教官たる外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の『新体詩抄』（明15）がその先駆的な試みであることは言うまでもない。「ブルウムフキールド氏兵士帰郷の詩」（外山訳）が巻頭に置かれ、「カムプベル氏英国海軍の詩」（矢田部訳）がその次に、「テニソン氏輕騎隊進撃ノ詩」（外山訳）が三番につづくが、軍事にかかわるものを選ばれるのも時代の反映で、「テニソン氏船將の詩（英国海軍の古譚）」（矢田部訳）「抜刀隊」（外山作）などもそれである。「西洋にては戦の時慷慨激烈なる歌を謡ひて士氣を励ますことあり即ち仏人の革命の時『マルセイ

エーズ』と云へる最と激烈なる歌を謡ひて進撃し普仏戦争の時普人の『ウオッチメン、オン、ゼ、ライン』と云へる歌を謡ひて愛国心を励ませし如き皆此類なり左の抜刀隊の詩は即ち此例に倣ひたるものなり」と説くところにもその態度は明瞭である。

皇国の風と武士の 其身を護る靈の

維新このかた廃れたる 日本刀の今更に

又世に出づる身の誉 敵も身方も諸共に

刀の下に死ぬべきぞ 大和魂ある者の

死ぬべき時は今なるぞ 人に後れて恥かくな

敵の亡ぶる夫迄は 進めや進め諸共に

玉ちる剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし

〔抜刀隊〕第二連

日本刀に象徴される武士道・大和魂が新たに天皇制下に蘇っているわけで、その勇壮な曲とともにこれが軍歌のプロト・タイプとなつたのであり、「勸学の歌」(矢田部作)「社会学の原理に題す」(外山作)などの教訓的なものも同じ根から出ている。軍事にかかわる場合は死のイメージを避け得ぬが、それに関連して「グレー氏墳上感懷の詩」(矢田部作)「ロングフェルロー氏人生の詩」(外山訳)「玉の緒の歌」(井上作)「チャールス、キングスレー氏悲歌」(外山訳)等、死と生をうたったものも見のがしがたく、『新体詩抄』の底音部には言い知れぬ哀感が流れている。巻末の「春

夏秋冬」(矢田部作)は「春は物事よろこばし吹く風とても暖かし／庭の桜や桃のはなよに美しく見ゆるかな／野辺の雲雀はいと高く／雲井はるかに舞ひて鳴く」とうたい出されているが、『小学唱歌集』にも見た日本の自然がその四季を通じてなつかしくうたい出されており、これも『新体詩抄』の内部を示している。

『新体詩抄』については、ここではそこに明治という時代を見るにとどめたいのだが、以後のいわゆる近代詩は軍事や教訓に示される公的な高音部をきりすて、死と生や自然にかかわる低音部を私的にうたうたうて行くことになるのである、次のような国木田独歩の批評からもその間の消息をうかがうことができる。

斯る時、井上外山両博士等の主唱編輯にかゝはる「新体詩抄」出づ。嘲笑は四方より起りき。而も此覚束なき小冊子は草間をくぐりて流るる水の如く、何時の間にか山村の校舎にまで普及し、「われは官軍わが敵は」てふ没趣味の軍歌すら到る処の小学校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。又た其のグレーの「チャルチャード」の翻訳の如きは日本に珍らしき清爽高潔なる情想を以てして幾多の少年に吹き込みたり。斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を此小冊子が全国の少年に及ぼしたる事は、当時、一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象なりとす。

(『抒情詩』所収「独歩吟」序 明30)

同じような証言を独歩は『小学唱歌集』に対しても機会あればしたであろう。「抜刀隊」的な『新体詩抄』の高音は広範な影響力を持っていたのであり、一方「グレー氏墳上感懷の詩」的なものもまたしみこんでいたのである。明治二十二年に発表された森鷗外らの訳詩集「於母影」の圧倒的な影響がよく云々されるが、文壇的規模ではなく、国民的規模で詩をとらえようとするならば、『小学唱歌集』や『新体詩抄』ははるかにひろく明治という時代とかかわりあっていたと言えるだろう。「我々は、『新体詩抄』の背景に、一つの季節が存在していたことを、知る。その完成を授けたものは、疑いもなく『時代の需要』であり、『時機』であつた。であればこそ、それは『嘲笑』にもかかわ